

岐阜薬科大(岐阜市)と県保健環境研究所(各務原市)は、危険ドラッグに含まれる化学物質の構造や体内での分解過程、幻覚や興奮といった作用を調べる研究に乗り出す。構造や作用を調べることで分析技術を高め、次々と出現する危険ドラッグの規制の迅速化につなげる。同大によると、危険ドラッグの成分分析は全国で行われているが、構造や分解過程、作用などを解明する研究は全国初。



会見する岐阜薬科大の原英彰副学長(右)ら
=9日午後、岐阜市役所

国は薬事法で危険ドラッグに使われている有害な化学物質を「指定薬物」にして、医療目的以外での製造・販売を禁止しており、その数は1400種類を超える。一方、指定の網を抜けられるように、化学物質の構造をわずかに変化させた危険ドラッグが次々とつくり出され、規制が追い付いていない状況。

同大などは、培った薬物の検出技術や解析技術を生かして指定薬物を詳しく調べ、新たに見つかった危険ドラッグの作用などを予測できるように情報の蓄積を図る。厚生労働省の下部組織である国立精神・神経医療研究センター薬物依存研究部の協力も得て、今春から指定薬物の構造分析、神経細胞や動物に投薬してどのような作用が起こるかなどを調べる。研究成果は同センターと共有するなど広く公開し、規制の迅速化につなげる。

同大と研究所は9日、岐阜市役所で会見。原英彰副学長は「全国初のチャレンジとなるが、社会貢献として取り組む」と強調。研究を主導する北市清幸教授は「指定薬物が体内で分解された後の代謝物の研究が進めば、危険ドラッグを使用したかがすぐ分かる検査手法も見いだせる」と展望を語った。